	二四	木	校醫身體檢査	
	二五	金	靖國神社臨時大祭（午前九時半迄ニ登校）	農園の馬鈴薯頭を出す頃。
	二六	土		燕はせつせと巣を營む。おたまじやくしの出る頃。
	二七	日		
	二八	月	健康增進强調（結核豫防に關する皇后陛下の御令旨）	池内　彰
5	二九	火	天長節（午前九時ヨリ擧式）	金魚屋がふれて通つた。
	三〇	水	靖國神社例大祭	三日月。
	一	木	開校記念日（午前八時ヨリ擧式）	木村金太郎
	二	金	聖武天皇祭（午前八時出發參拜）	藤棚の藤滿開。
	三	土		つゝじも滿開。
	四	日		

備考

(1) 火曜と金曜は、朝禮後、體育館に於て合同訓話が行はれる日である。

(2) 行事欄の事項は其の總てが、初一の教育材として取扱はれるといふのではない。前にも言つたやうに、教師だけが「今日は斯樣な日である、隨つて上學年に於ては、それに關して何等かの指導があるだらう」といつた程度の心覺えに止まるものもある。

(3) 行事欄、自然界欄の事項は追加されることを豫想してゐる。

(4) 行事は學校の取規めと無關係ではあり得ない。

乙表（四月分）

週	日	曜	修身	國語	算數	自然觀察	體操	音樂	習字	圖畫工作
1	一	火	一、ガクカウ							
	二	水				一、學校の庭				
	三	木								
	四	金		一、ラジオ體操	一、十までの數の數方		一、教練			
	五	土					(1)縱二列に			

2	六日		(カズノホン)					
	七月	三、校庭の遊戯	使用以前)	三、記念の木	(2)行進	一、ガクカウ		
	八火		(1)唱へ方		二、遊戯競技			
	九水		(2)數へ方		(1)走り合ひ			
	一〇木		(3)實物につき		(2)からかひ鬼			
	一一金	三、アカイアサヒ		三、庭の花	(3)毬入			
	一二土				三、體操			
3	一三日				(1)ラジオ體操			
	一四月	二、センセイ四、ハトコイ			(2)要目體操	一、習字用具の名稱・取扱方	三、自由なる	
	一五火				足側出		ものをふが	
	一六水				臂側擧振		せかる	
	一七木	三、コマイヌサン		四、庭の動物	胸後屈	二、躾	四、カミデツポウ	
	一八金				スベリ臺	三、姿勢・執		
	一九土				攀登		筆、磨墨	

4	二〇日							
	二一月	六、ヒノマルノハタ			行	二、ヒノマル	的修練	
	二二火				體前屈			
	二三水		二、春の野	五、春の野	正常歩			
	二四木		(カズノホン)		呼吸			
	二五金							
	二六土	七、ヘイダイサン						
5	二七日							
	二八月	三、天長節	三、日の丸の旗					七、ハタヲアゲル
	二九火							
	三〇水	八、アヒル						

教材は大體週に割當てゝ考へて置く。しかし其の豫定を固定すると、實際教育の圓滑を缺ぎ教授も亦不徹底に陷る。臨機應變の態度が必要である。

第二章　統一的運營

教科、暦、自然の大觀表が出來たといふことは、一面から言へば月又は週の教材が定まつた進程案が出來たといふことになるのであるが、それだけでは日々の教育實踐は行ぜられない。「今日はこれだけの指導を此の順序で爲す」といふ日毎の實踐案がより具體的に、用意周到に立案されねばならぬ。而して此の實踐案を腹案する場合には、學校の日課訓練の時間を考へ、其の日の天候を按じ、學級の時間割を考へ、「自然の觀察」の連續觀察の有無を考へる等、夫等の綜合判斷によつて一日の教育實踐を圓滑に有効に運營し得るやうに工夫せねばならぬ。

〔註〕我々の學校の時間區分

用意	7.50	
朝禮體操	7.55 …	8.10
1	8.10 …	8.50
2	9.00 …	9.40
集團錬體	9.45 …	10.10
3	10.10 …	10.50
4	11.00 …	11.40
晝食	11.40 …	0.30
清掃	0.30 …	1.00
用意	1.05	
5	1.10 …	1.50
6	2.00 …	2.40
下校	3時迄ニ完了	

初一の教授時間割

	月	火	水	木	金	土
1	國民	理數	國民	理數	體音	理數
2	理數	國民	理數	國民	國民	國民
3	國民	國民	國民	體音	國民	體音
4	藝能	體音	體音	藝能	藝能	

實踐案は其の日の朝に確定さるべきであるが、前日に於て大體を定めて置くことが望ましい特に、教材研究と準備とは前日までに完成して置かねばならぬ。但し、教材研究は、明日の分を小切りにして調べて置くといふのではいけない。少くとも一週間分には精通して居る建前で研究されたい。現在のやうに、各科目の月の教材並に其の指導要領が文部時報に發表されて居る時であると、一ケ月分に眼を通し、其の要點を把握することは必ずしも困難なことではない

から、それから割出して地方化し鄕土化する部面にも十分考慮を拂ひ得る餘裕がある。

一日の實踐案の部分として時限の指導案を考へるが、これは各時限の內容に連絡があり、むしろ一つのものを各方面から發展させて、而して一日の教育として纒まりのあるものとなすといふ建前に於ての時限の指導案であるべきであるから、上學年に於ける指導案とは自ら異る。

以上は、學級教育の統一的運營に關しての方法、心構へを事務的に述べたものであるが、眞によく統一的運營の實を擧ぐる爲には、更に、教師の頭と眼とが常に理念的に而してそれが全一的に輝いてゐて、日々の實踐教育を事務的にも理念的にも、くるひのないものにする、充實したものにするといふ全體的な識見と努力とが必要である。

錬成目標、教科經營の理想、各教材の目的から見ての心身一體の生活錬成が全一的に透徹しなければ教育の實績は擧がらないのである。

第三章　家庭に對しての要望

新體制教育の徹底に就いては、家庭の協力にまつものが多いから適當な機會に、家庭の人々に學校の要望するところを傳へることが大切である。

(一)　陛下の赤子たるの自覺

「子どもは我物である、これを如何樣に取扱はうと勝手である。」「子どもを學校に上げるのは一家一門の幸福繁榮を念願するが爲である。」といつたやうな考へ方は傳統的に持ち續けられた子ども觀であると思はれるが此の思想を改めさせねばならぬ。

天皇陛下の赤子として立派に御奉公の出來る「よい日本人」に育て上げる、精神も身體も。朝夕、ひたすらに之を念願して、子どもの教育に學校と步調を一にして進むことこそ、親としての御奉公の道である、といふ自覺を促すべきである。

(二)　學校まかせではいけない

子どもをよい日本人に育て上げる爲には、學校と家庭とが協力して盡さねばならない。それ

では家庭では、どういふ事をやればよいか。

教師用書を求めて讀むといふことは學校教育を理解しようとする精神に於て爲される場合、敢へて排拒する理由もないわけであるが、親達が教師役を務めて、學校で行はるべき教授を家庭に於て前以て行ふが如きは、むしろ有害無益である。

上級學校の入學といふことについて過敏である親達にしてみれば、ひたむきに知育方面に神經をとがらせる心情も、わからぬわけではないが、その點に對しては警戒を與へると共に初一教育のあるべき姿を說き聽かせ、及んで體力の原であるところの營養・休養・寢食等に就いては何と言つても家庭に於て行屆いた注意を仕て頂かねばならぬこと、初一教育に於ての躾の重要性を說き、その確立に向つては、これ又家庭の協力を望むことを語らねばならぬ。

農山漁村の親達は、どちらかと言へば一般に教育に對しては無關心である。教育のことは學校に一任するといつた態度の人々が多い。是等に對しては其の蒙を啓く用意に於ての話をせねばならぬ。

これは私が知る事實の話。學校で子どもは「學校に行く際の朝の挨拶」「歸宅第一番の挨拶」を教へられ、丹念に實際の言行を指導された。そこで家に歸り着くや開口一番「お母さん、ただ今」と挨拶をした。すると其の母は何と言つたか、將に牛をひいて出ようとするところであつたが、「何をぬかす、今頃歸りくさつて、はやう此の牛をひつぱつて草を喰はせてこい。」と可憐な子どもは、顏を眞赤にして、しかもべそをかいて、カバンを投げやつて、此の無知な母親の言に從つて、おろ〳〵しながら出て行つた。

何といふなさけない仕うちであらう。これでは學校の先生が如何に一生懸命になつて、よき躾を爲さうとしても駄目である。それは家庭に於て微塵に打碎かれて居る。

斯樣な事例は千に一つもあつてはならぬことだが、今日に於ても絕無とは言へないかも知れぬ。學校教育の何たるかを解せず、家庭のとるべき態度を知らぬ人々もあるであらうことを想つて適切なる啓蒙講話を爲すべきである。

(三)　勉强觀の改造

「教育觀の改造」と言ひ度いところだが、親達に言ふのであるから「勉强觀の改造」の方がよくわかるであらう。其の趣意は次の通りである。

親は、よく其の子どもに「勉强せよ、勉强せよ」といふ。而して其の勉强とは、机の前に坐つて本を讀んだり算術をやつたりすることを意味して居る。

國民學校兒童の勉强には、斯樣な勉强もあらねばならぬ、がそれは私が言ふまでもなく自學自修の一部面でしかない。

お手傳、お使、弟妹のもり、お掃除、草花の手入、家禽、家畜の世話、野外に於ての自然の觀察・物品の製作、玩具の觀察、分解構成等々。家庭生活の實務として初一の子どもに仕て欲しいこと爲させ度いことの領域は廣い。

それ故に斯樣な點に就いて、よく話してやつて、家庭の長者として如何に指導し、如何に見守るべきか。又自分達の生活は如何にあらねばならぬかといふことを納得させることが必要である。

なほ、之と關聯して、子どもの疑問に對しては親切であるべきことを特に注意する必要がある。學校では「科學する心」の錬成として、兒童の疑問を歡迎する「自然の觀察」指導に於ては特にさうである。

此の指導によつて、兒童は家庭に於ても、いろ〳〵の疑問を發するやうになるであらう。否發するやうにならなければならぬ筈である。しかし、家庭の人々が、子どもの發する疑問のすべてに正解を與へ得るとは考へられない。さればこそ、子どもの疑問をうるさがつたり、これを封じたり、甚だしきは叱りつけたりすることが行はれて居る。

斯の如きは理數生活の發展に新生面を開かんとする國民學校の教育精神に悖ること甚だしい「わからぬことはわからぬ。」として、「それはよい事に氣づきましたね、あした學校に行つたら先生におたづねするがよい。」といつた程度に取扱つて、あくまでも疑問を助長し、希望に燃えて學校に行き、又自ら其の解決を試みるといふ風に仕向けることこそ、子を愛する親の取るべき處理方法であることを傳へたい。

(四)　子どもと共に教師を信頼せよ

教師の口から斯樣な事を言ふのは變な氣もするが、親達が眞に其の子どもを愛するならば、子どもが絶對的に信頼する學校、教師に對して相當の敬意を拂ひ、さうした言動が子どもに見せられ感ぜさせられる必要がある。

學校を惡口し、教師を誹謗することは或る場合の感情から言へば痛快であるかも知れぬ。さりながらそれが其の子どもの心情に與へる惡影響は極めて深く大きいものがある。教師を信頼せざる子どもが、すなほに生長して行く筈はない。天に向つて唾すれば我が面上に歸ることを心得へねばならぬ。

若し、不審があり、不滿があれば、徒に之を子どもの面前で暴露することなく、適當なる方法によつて(手紙よし、來校よし)意志の疎通を圖ることこそ、保護者に望ましい事である。此の事は何も教師が自己擁護をするのではない。

陛下の赤子を育成する根本的な態度として、家庭の要望にそふ兒童育成の根本問題として、保護者の賢察を乞ふのである。

家庭に對して要望することは上に止まらない。擧ぐれば幾らもあるわけであるが、夫等は此に擧げ盡すべくもない。要は、國民學校の教育實踐に關して、家庭の協力を求むることの多々ある中から、先づ思想的異否を改めて頂いて、積極的に協力して頂き、相俱に明朗な教育實踐に精進したい念願に於て、適切なる事項を擧げて語るべきである。

而して、それは先づ入學の日に於て爲し、更に學級保護者會なり其の他の機會に於て爲すがよい。特殊な者に就いては家庭訪問を仕てゞも致したいことである。

第四章　環境の調査と整備

(一) 家庭調査

現住所、原籍地、家族の數、續柄、年齡、教養程度、在學所、職業、宗教、家の附近の情況生活程度、父母その他の人柄、勇士の家、譽の家等。

兒童の交友、通學路、既往疾病、食物(すき・きらひ・量等)保護者の見たる子どもの性情等。

是等に就きて、擔任教師がよく承知して居ることは、入學後に於て學校生活を通しての兒童の觀察と一體として、正しき兒童觀を確立する上に必要である。正しき兒童觀の確立は教育上基本的な條件である。

入學前に調査が完了しないならば、入學後、可成的早く調査し終ることが必要である。

(二) 學校・教室環境の整備

これには、まづ自然の觀察指導上より見たる學校・教室の設備がある。

農園、禽舍、池などは學校設備として急を要するものであるが、代用品としては、植木鉢、植栽箱、飼育箱、水槽、小鳥籠等が準備さるべく、これと相並んで必要である用具として、鍬熊手、シャベル、如露、餌集め籠等がある。

蟲眼鏡を使用せねばならぬほどの細微な觀察を行はせる必要はないからそれは不用である。又、捕蟲網はあつてもよいが、なくてならぬものではない。殊に毒壜などは當分全く不用である。生命をはぐゝみ育てさせる、小動物と雖も其の生命を尊重するといつた動植物愛護撫育のやさしい、うるはしい精神を涵養することに力を用ふべき時期に、殺したり解剖したりするやうな事は一切避くべきことである。植物の押葉をするのも蝶やトンボを展翅するのも同じではないかといふ人には、更に再考を促したい。

其の他、教室には國語教育の補助となる良き兒童讀物、科學心の發露を誘ふ玩具、雨の日の遊び道具(男兒向き、女兒向き、一般向き)等の準備が望ましい。

(三) 學習環圍氣の構成

其の日、其の週間の主教材となるべき修身・國語・算數・圖畫・工作等に關する黑板畫、掛圖、用具、作品等を展覽して、兒童が學校に來て教室に入るとすぐから一日中、それ等に注意して

或は談話し或は心構をなすといふ樣に仕向けることは學習態度の養成上より見ても教授の効果と能率を高める上から見ても必要なことである。

一切の物をかくしだてして、教授の時間になつてから、もつたいぶつて提出するが如きは賞めた事ではない。尤も、物により場合によつては、さういふことも必要であらうが、原則としては、教材に就いての時前工作に留意すべきである。

宮城の御寫眞・青少年學徒ニ賜ハリタル勅語

教室の前上方に奉掲して、皇國民の錬成に、皇國民たるの修練に全力を擧げて行ずるの誓を新にし、又新ならしむべきである。

（教室環境の整備といふ概念の中に入れるには、あまりにおそれおほく、此處に特筆大書する所以である）

第五章　兒童觀察

（一）個別觀察

出來る・出來ない、上手・下手、速い・遲い、緻密・粗雜、機敏・遲鈍、陽性・陰性、落ちついてゐる・がさ〳〵してゐる、熱心・不熱心、弱氣・强情、だまり・おしやべり、聲が高い・低い、用語や態度の上品・下品、友達にすかれてゐる・きらはれてゐる、いぢわるである・親切である、調子に乘る子・乘子らない子、物忘れをする子・がんばる子、創作的な子、體力の强い子・弱い子等々の觀察は個別的な能力・氣質・心性・性行・體力・生活等の觀察であつて、所謂個性調査簿式の觀察である。

斯樣な兒童觀察が錬成教育上重要な意味を有することは言ふまでもないことで、これは誰もがやることであるが、これに就いては、斯うした觀察から導かれて來る兒童の優劣觀を露骨に示して、或は兒童を卑屈にし、或は傲慢にし、或は勉學の興味と熱とを失はしめるといつたやうな事の無いやうに愼重であらねばならぬことを言つて置きたい。

(二) 集團觀察

これは學級を大觀して學級の心理的傾向、學習成績、學習態度、訓育の効果等を把握して、將來の對策を考慮する資料とする爲に行ふのであつて、週末、月末、學期末、學年末には必ず爲さねばならぬ。ことに、地方の學校の如く受持ちが幾度もかはるところでは一層その必要があり、引繼ぎの際には具體的に之を語り得る用意があらねばならぬ。級風の樹立は此の集團的觀察を怠つては望まれない。

集團觀察は帳簿に書留めて置くがよい。

第一週を顧みて

一、兒童の生活は活潑ではなかつた。蓋し次の様な事情によるものであらう。

(1) 學校の様子がまだよくわからない。

(2) 友達同志がまだ馴合つて居らぬ。

(3) 學年始の身まはり指導の爲に、彼等を連れて廻ることが多かつた。

(4) 天氣がわるくて校庭に開放し得る日が少かつた。

□一日も早く彼等が明朗に活潑に生活し得るやうに仕向けねばならぬ。

二、環境に對する兒童の態度はどうだつたか。

(1) 玩具いぢりもあまりやらない。

(2) 黑板の繪を見てもあまり語らない。

(3) ピアノやオルガンにも手をかけない。

蓋し、扱つてよいのかわるいのか、ひいてよいのかわるいのか、話してよいのかわるいのかわからないのであらう。尤も、無いわでけはないが、寄つてたかつて取り合ひをするとか、聲高に話し合つたりすることがない。遠慮して居るのであらう。

三、彼等の言葉

(1) 一體に低聲である。

(2) 方言が多い。

□活潑に話すやうに仕向けねばならぬ。

第二週を顧みて

一、著く腕白になり、女兒は教師にじやれついて來た

第一週に於ての彼等の生活は、入學前の自然さ、活潑さをもたなかつた。それはやはり境遇の一變から來た一時的の現象だつた。

寄宿舍の庭へタンポポを摘みに行つたり、校庭の土手にかけ登つたりする者もある。運動場を縱横に走りまはつたり、ころんだり、教室内でも追つたり追はれたり、さては體育館の諸道具を引張り出したりする。

女の子がじやれついて來た。それは前週には殆ど無かつたことであるが、此の週は教室といはず運動場といはず「センセー」と言つて、あまへついて來る。

ところが唯一人〇〇〇〇だけは、先生の「セ」も言はねば寄りつかふともせぬ、一人ぼつちで遊んでゐる。注意して見る必要がある。

二、環境に對する態度には大した變化はない。

花が散らうが嵐が吹かうが、兒童にとつては何の感興も無いと言ひ度いほどに平靜である。花を悼む氣持も惜む心も無いものか。では自然に對する知的發動はどうか。これもまだ〳〵特筆すべきものがない。「これは何か」「あれは何か」といつたやうな質問さへあまり無い。

事物、現象を在るがまゝに觀て、それに向つて理知の眼を鋭く向けないのは此の學級だけのことではあるまいか、それとも此の年頃の、入學初期に於ける現象としては、これが普通であり自然なのであらうか。

斯うは言ふものゝ、教師の方から啓發するといふ態度で、働きかけると相當について來る。どちらかと言へば私は彼等の自然的な發露の有樣、その程度を知り度いと考へて居つたので、こちらから、つゝきかけるといふことはわざと差控へたのであつた。

三、本週に於て、彼等が最もよくしたことは、文字を知らうとする爲の質問であつた。これは頗るめざましいものがあつた。本週も前週の如く天氣の惡い日が多く、隨つて室内の生活が多かつたといふのが其の主因であると思はれるが、もつと根本的なものは蓋し次の事情であらう。

彼等が入學前から學校に對して絶大な期待をかけたものは、字を教へて頂くといふことであつたらう。「字を學び、おかんじやうを習ふ。」といふことが彼等の學校觀の中心的なものであらう。それは、おそらく其の家庭に於て受入れた學校觀であらうが、彼等の學校觀は、もつと

內容的に擴められ、隨つて學習生活態度も、環境に對して働きかける態度も變つて來なければならぬ。

私は、さういふことに就いて、彼等の眼を開くことに努力しなければならぬ。

四、躾の實踐、生活の發展

自分の事を、たしかに行るだけでなく、進んで運動用具の後片付を仕たり、教室內の整理整頓に心を用ふる者が、ぼつ〳〵現れて來た。此の風は、だん〳〵助長して、自己一身のことに關する世界から、學級的・社會的に其の道德的生活が發展して行くやうに指導しなければならぬ。

五、兒童の言葉は餘程はつきりして來た

幼稚園では聲高に話すことはとめられてあつたらしく、子どもがこんなことを言つた。「幼稚園の先生は、大きな聲で言ふとおこらはるが、池內先生は大きい聲で話せと言はゝる」と。

高く大きい聲で話せよと言つても、頓狂な耳鳴りのするやうな聲で話されてはたまらぬが、話がよくわかるだけには高く話さなければいけない。兒童の言葉は餘程はつきり聞きとれるやうになつて來た。

これは私の教育日誌(現初等科四年の子どもが一年生であつた年の合科教育日誌)の中から、四月の第一週分と第二週分を移したものである。現制度に於ての教育實踐に關してのものでないから、それだけに讀者には、ぴつたりと來ないかもわからぬが、集團觀察の必要を强調する私の氣持ち並に其の記錄の內容に就いては、いさゝかなりとも御諒解を得たことゝ思ふ。

第六章　學年相應の錬成

これが甚だ大切な指導態度である。學級の動き。各個人の觀察は細な點にまで及ばなければならぬが、それをどう處理するか、どう仕向けて行くかといふことに就いては教師の卓越した識見によつて裁量しなければならぬ。

なれさせる、眼を開く、深める。此の三つの建前から個々の問題を適正に取扱つて行くに就いては一方ならぬ苦心、考慮を拂はなければならぬ。

教師が如何にあせつても發展段階を飛躍しては、よき結果は得られない。けれども特殊な子どもの積極的な活動、優秀な成績を一般に紹介して、あるべき生活の姿を具體的に知らせることは、學級の文化を高め、個人の志氣をさかんにする上に必要である。學年相應の錬成と言つても、より以上の子どもの活動を阻止してはいけない。

昭和十六年五月十五日印刷
昭和十六年五月二十日發行

國民學校 初一の學級經營
【定價壹圓六拾錢】

著作者　池内房吉
發行兼印刷者　吉田信造　京都市三條廣道東
印刷所　からふね屋印刷所　京都市東山區仁王門南
發賣所　東京堂・北隆館・盛林堂　川瀬書店・黒野書店・柳原書店　菊竹書店・大野書店
發行所　晃文社　東京市神田區錦町一ノ二七　京都市三條廣道東　振替東京七五四一五番

池内　晃文社

國民學校教育體系

一卷 國民學校教育實踐原理 廣島高等師範教授 守內喜一郎著
二卷 國民學校 國民科修身教育 廣島高等師範訓導 堀之內恒夫著
三卷 國民學校 國民科讀方教育 廣島高等師範訓導 佐藤德市著
四卷 國民學校 國民科綴方教育 廣島高等師範訓導 田上新吉著
五卷 國民學校 國民科國史教育 廣島高等師範訓導 大島信一著
六卷 國民學校 國民科地理教育 廣島高等師範訓導 柴田來著
七卷 國民學校 理數科算數教育 廣島高等師範訓導 中野恭一著
八卷 國民學校 理數科理科教育 廣島高等師範訓導 桑原理助著
九卷 國民學校 體錬科教育 廣島高等師範訓導 中尾勇著
十卷 國民學校 藝能科音樂教育 廣島高等師範訓導 有賀正助著
十一卷 國民學校 藝能科圖畫・工作教育 廣島高等師範訓導 大竹拙三著
十二卷 國民學校 藝能科家事・裁縫教育 廣島高等師範訓導 岡本公子著

四六判上製 各卷一圓六十錢 送料十錢

晃文社 發兌

國語教育文庫

1 讀本教材の文學的考察 奈良友子高等師範講師 德田淨著
2 國語教室の性格と指導 奈良女子高等師範訓導 增田勳著
3 言語教育概論 與水實著
4 國語音聲論 法政大學教授 大西雅雄著
5 國語教育の論理 法政大學教授 大場俊助著
以下續刊
私の讀方研究授業 奈良女子高等師範前訓導 秋田喜三郎著

四六判・定價各一・五〇 送料〇・〇九

晃文社 發兌

讀方教育體系

一卷 國語解釋學 廣島文理大學教授文學博士 勝部謙造著

二卷 讀方教育思潮論 東京女子高等師範教授 石井庄司著

三卷 讀方學習の心理 東京高等師範講師 丸山良二著

四卷 讀本の朗讀法 東京文理科大學教授 神保格著

五卷 讀本の語法 廣島高等師範教授 鶴田常吉著

六卷 讀本の體系的研究 奈良女子高等師範前訓導 秋田喜三郎著

七卷 讀方教育の學年的發展 東京高等師範訓導 田中豊太郎著

八卷 讀方教授體系論 東京高等師範訓導 佐藤末吉著

九卷 讀方教授の指導過程 東京高等師範訓導 山内才治著

十卷 讀方教材の類型と指導 廣島高等師範訓導 佐藤德市著

十一卷 讀方教授の技術體系 東京成蹊學園訓導 西原慶一著

十二卷 讀方教育實踐諸問題 東京女子高等師範訓導 德田進著

四六判・上製箱入・各卷頒價一圓五十錢・送料十錢

晃文社 發兌

算術教育體系

一卷 算術教育の動向 東京高師教授 佐藤良一郎著

二卷 算術教育實踐原理 廣島高師教諭 高崎昇著

三卷 算術教育の學年的發展 奈良女高師訓導 池内房吉著

四卷 算術教育の類型と指導 東京高師訓導 高木佐加枝著

五卷 意味發見算術教育の指導過程 東京成蹊學園訓導 藤原安次郎著

六卷 新算術の必須用具と活用 廣島高師訓導 山本孫一著

七卷 算術教育作問の原理と實踐 成蹊學園訓導 香取良範著

八卷 算術教育實踐諸問題 廣島高師訓導 中野恭一著

九卷 珠算教育の理論と實踐 東京商大講師 川村貫治著

四六判・上製箱入・各卷頒價一圓五十錢・送料各十錢

晃文社 發行

新興理科教育體系

一卷 新興理科教育論 東京文理大學教授理學博士 福井玉夫著

二卷 理科教育實際指導要訣 女良女子高等師範教授 神戸伊三郎著

三卷 理科實驗の原理と實踐 廣島高等師範學校訓導 桑原理助著

四卷 理科生物教材の組織と指導 東京女子高等師範訓導 瀨野尾秀義著

五卷 理科理化教材の組織と指導 奈良女子高等師範訓導 横山誠司著

六卷 低學年自然科實踐機構 東京成蹊學園訓導 栗山重著

七卷 理科學習訓練實踐體系 東京高等師範訓導 岸一敏著

八卷 理科環境と設備の新工夫 廣島高等師範前訓導 關原吉雄著

九卷 理科教育實踐諸問題 [illegible]高等師範訓導 北川若松著

四六判・上製箱入・各卷頒價一圓五十錢・送料各十錢

文社發行

272
162